

舌出し三番叟 娘道成寺 鷺娘 身替りお俊 鞍馬獅子
 関の扉 戻り駕 草摺引 権八 鬼次拍子舞 今様須磨
 三人形 かさね 六歌仙 保名 お染 藤娘 蜘蛛の絲
 京人形 三社祭 勢獅子 靱猿 供奴 将門 どんつく

芝居藝一冊は全書 十巻

連獅子 市原野のだんまり

宗清 田舎源氏 三人片輪

山姥 棒しばり 太刀盗人

お夏狂乱 良寛と子守

蔵元

東京創元社

娘 むすめ

道 どう

成 じょう

寺 じ

(京鹿子娘道成寺)
きょうかのこむすめどうじょうじ



娘道成寺

郡司 正勝

宝暦三年（一七五三）三月、「男伊達初買曾我」の第三番目に、初代中村富十郎が、江戸下りの初お目見得に、中村座で初演した。作詞は藤本斗文、作曲は杵屋弥三郎。唄は吉住小三郎で、長唄曲である。

富十郎は、これを江戸の舞台にかける前に、上方で、すでに二回上演しており、生涯に十数回演じたという。

配役、ワキ僧は、中村伝九郎、市川八百蔵が勤めた。

紀州道成寺に伝わる安珍清姫の伝説をもとにしてできた能の「道成寺」を、かぶき風に舞踊化したもの。

筋は、道成寺伝説の後日譚ともいべきもので、白拍子に化けた清姫の亡霊が、道成寺に鐘供養があるときき、舞にことよせて、かつて男を隠した恨みの鐘にとび入り、蛇体になって現われる。

ただ、と答えたというが、富十郎の先見の明とされているのだ、と答えたというが、富十郎の先見の明とされている。

近代の娘道成寺の踊り手では、四代中村芝翫・九代市川團十郎・六代尾上菊五郎・現中村歌右衛門・現尾上梅幸があり、女方の花とされる、代表的な大曲の舞踊である。

着付は、緋縮緬に枝垂れ桜の縫取模様、帯は、黒縹子に狂言模様の縫取りの下げ帯。引き抜くと、浅黄とトキ色の縮緬に、おなじく枝垂れ桜の模様、着替えが藤色、羯鼓の条りは白地に幔幕、火炎太鼓の模様。鐘入りののちは、白緞子に銀鱗の箔摺である。

所化は、昔は二人で出たものを、九代目團十郎のときから大勢出るようになった。

「道成寺」が歌舞伎にさかんに取り入れられたのは、元禄ごろで、元禄十四年の「三世道成寺」が名高いが、榊山小四郎は、軽業で「道成寺」を演じ、その地の一部が、地唄の「語り道成寺」として残っている。また、水木辰之助は、はじめて鐘入りを演じたといわれる。また初代荻野八重桐は「契情道成寺」をつとめ、初代芳沢あやめの演じたものは「あやめ道成寺」といわれる。さらに、初代瀬川菊之丞は「傾城道成寺」（中山道成寺とも、無間鐘新道成寺とも、かつらぎ道成寺ともいう）を享保十六年の春に中村

しかし全曲の構成は、むしろテーマを離れた、各種の華麗な組曲ともいべきもので、道行・手踊・鞠唄・花笠踊・手拭踊・羯鼓・鈴太鼓・鐘入り・祈り・蛇体（見現し）からなっている。また最後に、「押戻し」のつく場合もある。「鞠唄」と「山尽し」は、この富十郎の江戸下りのときに、はじめて入ったといわれ、また、しばしば道行は略されて演ぜられることが多い。衣裳の引抜きや、ぶっかえりがあり、華麗な舞踊で、そのみどころは、ピラリ帽子をつけて花道から登場する義太夫による道行、さらに鳥帽子を頂いて白拍子になっての舞から、乱拍子を踏むくんだりや、へ真如の月を眺めあかさんで、中啓で鳥帽子をはねのけて、がらりと町娘にくだけて、恋の手習になるくどきの箇所であるが、六代目尾上菊五郎は、羯鼓や鈴太鼓の楽器を用いて踊る振りがむずかしいといっている。

初代中村富十郎が踊ったとき、それをみたある人が、富十郎に向って、鞠唄、花笠踊や、恋の手習のところなどはもう少しむずかしい振りがあってもよいのではないかと言うと、富十郎は、身不肖の私なれど、なるほど、もう少しこみ入った振りの工夫はできないわけではないが、私が、自由にもむずかしい振りをしたなら、私一代限りで終り、「道成寺」というものは、すたってしまうだろう。そこで末にまで道成寺が残るように、誰でもできるような振りをつけ

している。さらに、延享元年正月中村座で、おなじく菊之丞が「百千鳥娘道成寺」（さなきだ道成寺）を演じて名高い。これらを集大成したのが、中村富十郎が演じた木曲とされている。

道成寺にはその他、別種のものが行われている。それらを含めて道成寺物という。立役が男で演ずるものに「男道成寺」「奴道成寺」がある。前者は、宝暦四年に、初代中村助五郎が勤め、後者は、大坂で浅尾工左衛門が勤めているが、嵐三五郎が勤めたものを「忠文の道成寺」といい、白拍子を引き抜いて狂言師になる「奴道成寺」は、文政十二年に、中村芝翫が、江戸で「江戸紫男道成寺」という名題で演じたものが、今日に伝えられている。「二人道成寺」は、天保十一年に、十二代市村羽左衛門と四代中村歌右衛門がはじめて競演したもので、今日なおしばしば上演される。なお、地唄舞に「鐘ヶ岬」があり、荻江節に「鐘の岬」がある。

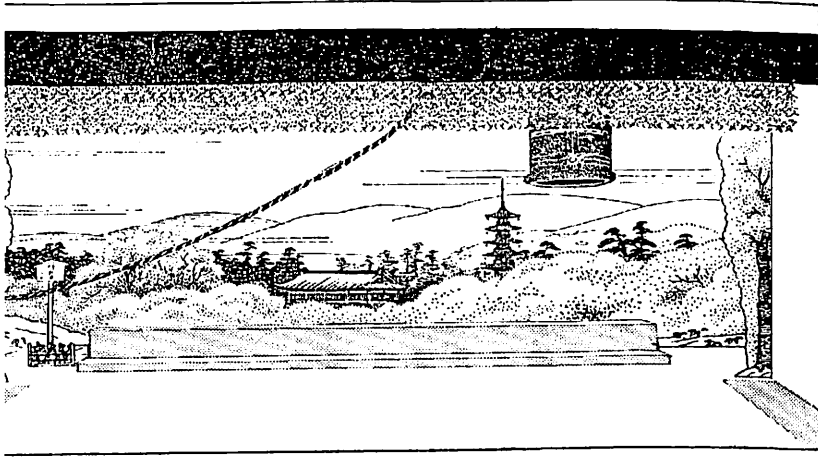
これらは、沈鐘伝説に道成寺を結びつけたもので、江戸で、人気を博した富十郎が、帰坂して、「九州釣鐘岬」（並木正三作）という狂言のなかにとり込んで踊ったときの外題が残ったもので、箏曲の方では「鐘が岬」とし、さらに山田流でこれを「新娘道成寺」ともいった。また荻江に移

章がとり入れられている。ほかに、河東節、一中節の「道成寺」、長唄の「紀州道成寺」がある。また、民俗舞踊にも、東北の山伏神楽では、「鐘（金）巻」という曲になっており、琉球の組踊りでは「執心鐘入」となっている。なお「双面」は、この道成寺物の変形といっている。

収録の台本は、明治二十五年六月、篠田扇三署名本を使用した。

なお、本台本は、「押戻」付きになっている。押戻しは、大館五郎、竹貫五郎、荒藤太などという名で、大太鼓入りで、向う揚幕から登場し、鐘からあらわれた般若と対立する。般若は、白地に銀鱗の着付に、緋精巧の長袴、薄衣をかづいで、紅白の撞木をもつ。五郎は、白に紫の童子格子の着付に、黒のトンぼ帯、日和下駄に笹つきの竹をもち、獅子皮の髪に、筋隈をとり、花道でゆきあい、へ謹請東方青龍清浄。謹請西方白体白龍」となる。

なお、「日本戯曲全集」の「舞踊劇集」に収録されたものは、安永八年三月大坂角座の上演のもので「鐘恨重振袖」である。



鐘供養の場

娘道成寺

鐘供養の場

役名 白拍子花子・後に般若 大館五郎 同宿善心坊。
同・沢山坊 同・斎念坊 同・陀仏坊 住僧阿闍梨。捕手大勢。

竹本連中
長唄雛子連中

本舞台、一面の五色の段幕。所々に桜の大樹。もつとも灯入り張り、後に出囃子籠段の見切。日覆より爛漫と枝垂桜の吊枝二段に下ろし、東西の棧敷。向う正面とも桜の水引。同じく打抜見事に飾り、舞台上手に桜に釣鐘をつり上げ、紅白ないませの綱を下手の桜の樹につなぎ、いつもの所枝折門。この外、練塀の打返し。竹本の出語り台。舞台前より花道へかけて上手板、春草のあしらい。好みの通りよろしく、音楽にて幕あく。
ト頭取出て役触れあつて入る。浅黄幕切つて落とす。
すゝ向うより、尺山坊、陀仏坊、斎念坊、善心坊、い



「二人道成寺」 三代目左團次と現之権



「奴道成寺」 市川猿蓑

沢・齋 聞いたかく。
陀・善 聞いたぞく。

ト言いなから、四人舞台へ来り、

沢山 コレサ陀仏坊、最前から聞いたぞくと言僧は何を聞いたぞくというのだ。

陀仏 愚僧が聞いたぞくと言ったのは、今度の芝居の評判を聞いたかと言ったのだ。

齋念 なるほど、その評判は当国までひびいて愚僧も聞いたが、また善心坊も聞いたぞくと言ったのは何のことだえ。

善心 愚僧が聞いたぞくと言ったのは、今日の法事の精進料理、こんにくの刺身、鼻へかきこんだカラシの匂いが、よくキイタぞくと言ったのだ。

沢山 兎持ちのならぬからい洒落じやの。

陀仏 そうして吾僧が今聞いたかくと言ったは何のことじや。

沢山 されば愚僧の聞いたかくというたは……突鐘も出来せし事ゆえ、今日から七日の間鐘供養があるとの事、その話を聞いたかくというたのじやわえ。

善心 それは何よりありがたい、愚僧が先へもらって参るう。

ト善心坊、行きかゝるを、

を思い立ちて候。あらたに鑄立てし突鐘を鐘樓へ掛けられしよナ。

善心 はや突鐘は鐘樓へ掛け置きまして、

皆々 ござります。

住僧 それは一段大儀に候。……それ突鐘は一魚千頭の苦身、一睡鐘の所に離れ、ながく菩提の因種をなす。また思ふ仔細あれば、鐘供養のそのうちは、女人はかたく禁断たるべし。この制札を彼処に建て置きてよかろう。

四人 かしこまってござります。

ト四人のうちにて、件の高札を更に桜の木へ立てること

あつて、

善心 師の御坊の仰せゆえ、

沢山 女人禁制の制札、

齋念 彼処なる桜のもとへ、

陀仏 御覧の如く建て置きまして、

四人 ござります。

住僧 七日の間、女人はかたく禁制なるぞ。

四人 かしこまって候。

住僧 しかと張番つかまつれ。

トやはり音楽にて、住僧上手へ入る。四人思入れあつて、

陀仏 コレく善心坊、どこへ行くのだ。

善心 どこへ行くものだ、今沢山坊が、今日から七日の間金をくれるというから、もらいに行くのだ。

沢山 それは吾僧が聞き違いだ。このせちがらい世の中に、たゞ金をくれるものがあるものか。わしが今いうたのは鐘供養があるというたのじや。

齋念 イヤハヤ、欲ばつた人だなア。

善心 ハ、ア、そうか、おれは又、今日から金をくれると聞いたから、もらいに行こうかと思つたに、とんだ間違いだ。

齋念 これはしたり、そのような仇口が師の坊へ知れたらお目玉。この趣を注進して……。

ト行きかゝる。善心坊びっくりし、とめる。

ト言うは嘘じや、有様は愚僧もその氣じや。

沢山 なにを言わつしやる。

皆々 ハ、ハ、ハ。

トこれにて音楽になり、上手より住僧、朱の衣形にて、高札を持ち出で来り、上手に住まい、

住僧 イヤなに、所化たちはあるかヤイ。

四人 ハア、御前に候。

ト四人前へ出て、手を突く。住僧、思入れあつて、

住僧 これは当山道成寺の住僧なるが、このたび鐘の供養

まれぬ人間界。

沢山 鐘供養のために女禁制とは、野暮な話だ。

陀仏 とかく浮世は女と酒じやて。

善心 ところで愚僧が、般若湯という大妙薬を持っているぞ。

沢山 シテその般若湯という薬は何じやな。

善心 今お開帳をするから、つゝしんで拝んだりく。

ト善心坊、またぐらから一升徳利を出す。三人見て、

沢山 これは一段、

三人 のむあみだく。

ト三人、拜むことよろしくある。

善心 幸い、またぐらで爛もできてあるわえ。

沢山 この上は何ぞ肴がほしいものだ。

陀仏 オツとそこはぬからぬ。……それ、天がい。

ト懐よりゆでだこを出す。

齋念 これはふしぎ、酒も肴も揃つた上は、

善心 般若湯をのみながら、

陀仏 師の坊の仰せゆえ、

沢山 さらば番頭、

四人 いたそうか。

ト四人、酒をのみにかゝる。下座の謡になる。



六代目尾上菊五郎の道行ぶり

ん。
ト知らせにつき、竹本出語りになる。
竹本へ月は程なく出汐の、煙みちくる小松原、いそぐとすれど振袖の、ひらり帽子の姿さえ、人目はすかしかおよ花。
へしどけ形ふりア、はずかしや、鐘の供養にものすき参り、あじな娘と人毎に、笑わば笑え浜千鳥、君

のぬる夜のきぬくを、思えば憎や世の中の鐘もくだけよ撞木も折れよ、さりとてはさりとては、恋を知らざる鐘つき、情ないぞや憎らしい、忘るゝ暇も泪川、恋の氷にとじられて、身を切りくたくうき思い、浮寝の鴛鴦の小夜ごろも、世をも人も恨むまじ、恋をする身は浜辺の千鳥、夜毎々々に袖しほる、しよんがえ、かわす枕のかねごと、門に松立てあしたには、梅ヶ香薫る窓のうち、桜は散

りて早苗時、螢の夕雨時や、蚊やりふすほる軒のつま、秋風そよと音信れて、田面に落つる雁の声、実に月ならば十三夜、菊の霜月濡れ染めて、わかればかなき鳥の声、たゞわれをのみ追い来るかと、科なき鐘を恨みしも、この罪科の数々を、読むとも尽きじ真砂路の、光照りそう法の夜、ようく御寺に着きにけりく。

トこの文句のうち、向うより白拍子出て来り、花道にて振りあって舞台へ来る。坊主四人、思入れあつて、

善心 なんとるいゝ匂いがして来たぞ。

三人 なるほど、いゝ匂いだく。

沢山 なんでもこっちの方でよく匂うぞ……

ト下手へ来り、白拍子を見て、

アリヤ何だろう。

齋念 ちょっと見たところ、あれは白拍子く。

陀仏 イヤく生娘く。

齋念 白拍子く。

陀仏 生娘く。

善心 ア、コレ両僧、しばらく待ちたまえ、そう互いに争つても本性を見さだめねば勝負がわからぬ、かよう致そう、この般若湯を……こう一杯つき置いて、勝った方が

沢山 こりやいゝ思いつきだ。

齋念 イヤ白拍子く。

陀仏 イヤく、生娘く。

白拍 この御寺へ案内申し候。

陀仏 案内とは生娘にて候や。

齋念 たゞし白拍子にて候や。

白拍 これはこのあたりに住む白拍子にて候。

齋念 ソリヤ白拍子だぞ。

ト齋念坊、件の酒をのむこと。

沢山 いよくこなたは白拍子かえ。

白拍 アイ、この御寺に鐘の供養があると聞き、はるく拜みに参りました程に、どうぞ拜まして下さんせいな

ア。
沢山 サ、拜ましたくは思えども、師の坊の仰せきびし

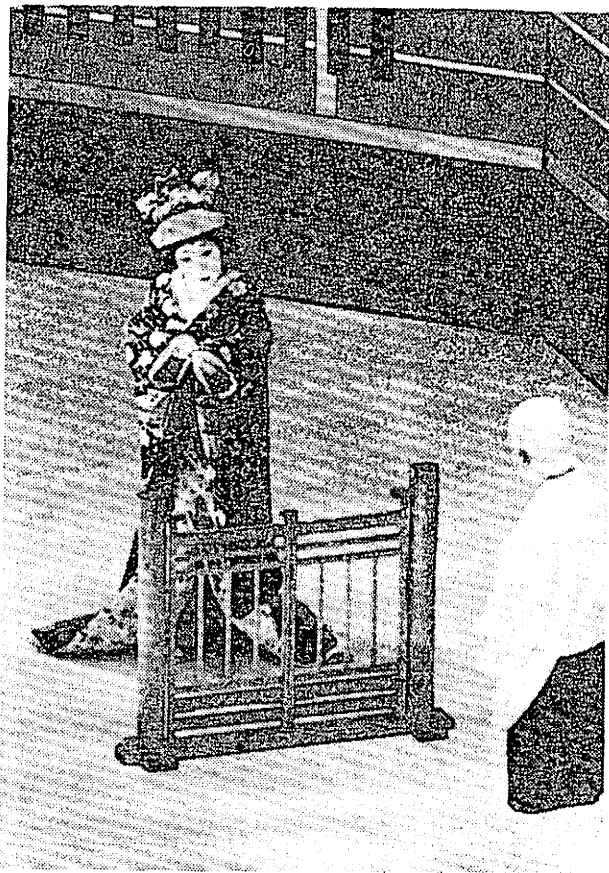
く、
齋念 女人はかたく禁制く。

皆々 ならぬぞく。

白拍 はるく拜みに来たものを、拜ませぬとは意地の悪い坊さんじゃわいなア。

齋念 イヤ悪いと言うは女の事、内心如夜叉というではな

いか。



「花道の問答」 中村歌右衛門

白拍 そりやなんの事じゃえ。
 齋念 汝しらずや、色のことなり。
 善心 二十四文の比翼の鳥は。
 白拍 そりやなんじゃえ。
 善心 汝しらずや夜鷹のこと。
 陀仏 天保一枚で匂いの高いは。
 白拍 そりやなんじゃえ。
 陀仏 汝しらずや、てんぶらの事なり。
 沢山 匂いはぶんくく喰えは忽ち暖まる、これいかに。
 白拍 そりやなんじゃえ。
 沢山 汝しらずや、煮こみの牛肉。
 白拍 ほんにおかしいお方じゃわいなア……サア、こりやなんじゃえ。

んのことじゃえ。

陀仏 サア、五藏飯和合とは、

善心 うどんそばきりの地口であろう。

白拍 なんのまア……飯の浮世ではござんせぬかいなア。

沢山 イヤなかくむつかしい事を知っているわえ。

齋念 しからば一不審もって参ろう……コリヤく女、ちんく鴨とは如何にく。

ト手を握り、出す。

善心 にぎり傘を、

四人 出したのは。

白拍 この手のうちは雀じゃわいなア。

四人 ナニ雀じゃと。

白拍 サア、この手のうちの雀が生きているか死んでいるか、当てゝ見やしゃんせ。

善心 イヤ、その手のうちの雀が生きているというたら、

沢山 手のうちでぐつとしめつけ殺す気か。

齋念 また死んでいるというたら、

陀仏 そつとはなして逃がす気か。

四人 その手はくわぬぞ。

白拍 ソレ。

ト手を開く。皆々見て、

四人 なんにもない。

白拍 サア、あると思えばあり、

四人 ないと思えばなし。

善心 柳は、

白拍 みどり、

沢山 禿の名。

齋念 花は、

白拍 くない。

陀仏 しわい客なア。

白拍 色即是空、空即是色……鐘の供養は、

四人 広大無辺。

白拍 モシ坊さん、どうぞ拝まして下さんせいなア。

寺の……トこのうち、舞うことよろしくあって、知らせにつき正

四人 舞うて見せやれ。

白拍 そりやモウ、拜ませて下さんすことならば、なんなりと舞うて見しようわいな。

四人 そりや相談が出来たく。サアくこちらへ、きなこ餅く。

トこれにて花子、枝折のうちへ入る。

善心 幸いこゝに烏帽子の候えは、これを着して、

四人 御舞い候え。

白拍 ア、ラ嬉しや、外間舞を舞い候べし。

四人 御舞い候え。

ト鳴物になり、花子、烏帽子、狩衣をつけ、思入れあつて、

白拍 嬉しやしばし舞わんとて、あれにまします宮人の烏帽子をしばし仮に着て、すでに拍子をすゝめけり……ウタイへ花のほかには松ばかりく、暮れそめて鐘やひくらん。

はじめて伽藍、橘の道成興行の寺なればこそ、道成寺と

は、ウタイへ名づけたり。山寺の春の夕暮来て見れば、入相の

鐘に花ぞ散るらん。

トこのうち、舞うことよろしくあって、知らせにつき正



カッポの段「山戻し」 四代目中村時蔵



「末はこうじゃにえ」 中村歌右衛門



振り出し笠の段「梅とさんさん」 尾上柳幸

エ、かわゆらしさの花娘。
 トこのうち、花がさの振りあって納まる。
 へ恋の手習い、つい見習いて、誰に見しよとて紅鉄
 漿つきよぞ、みんな主への心中だて、オ、うれしオ
 オうれしへ末はこうじゃにエ、そうなるまでは、と
 んと言わずにナ済ませぞエと、誓紙さえ偽りか、嘘
 かまことか、どもならぬ程逢いに来たへふつつり悟
 気せまいぞと、たしなんで見ても情なや、女子には
 何かなる、殿御々々の気が知れぬ、悪性な悪性
 な気が知れぬ、恨みく／＼かこち泣き、露をふくみ
 し桜ばな、さわらば落ちん風情なり。
 トこのうち、手拭の振りあって納まる。
 へ面白の四季の詠めや、三國一の富士の山、雪か
 と見れば花吹雪か吉野山、散り来るはく／＼嵐山、朝日
 山々を見渡せば、歌の中山石山の、末の松山、いつ
 か大江山、生野の道の遠けれど、恋路に迷う浅間山、
 一夜の契り有馬山、いなせの言の葉飛鳥木曾山待乳
 山、三上山祈り北山稲荷山へ縁の結びし妹背山、二
 人が中の金山、花咲く茶このく／＼姥捨山、峯の松風
 音羽山、入相の鐘を筑波山、東叡山の月のかんば

長唄へ鐘に恨みは数々ござる、初夜の鐘を撞く時は諸行
 無常とひゞくなり。後夜の鐘を撞く時は是生滅法と
 ひゞくなり、晨朝のひゞきは生滅滅已、入相は寂滅
 為樂とひゞくなり。聞いて驚く人もなし、我も五障
 の雲晴れて、真如の月を眺めあかさん。
 へ言わず語らずわが心、乱れし髪を乱るゝも、つれ
 なきは唯うつり気な、どうでも男は悪性者、桜さく
 らとうたわれて、いうて袂のわけ二つ、勤めさえた
 だらうか／＼と、どうでも女子は悪性者、都ぞだちは
 蓮葉なものじゃえ。
 へ恋のわけ里、武士も道具を、伏せ編笠で、張と意
 気地の吉原へ花の都は歌で和らぐ、敷島原に、勤め
 する身は、誰と伏見の墨染へ煩惱菩提の撞木町より、
 難波四筋に、通い木辻に、禿立ちから、空の早咲き、
 それがほんに色じゃ、一イニウ三イ夜露雪の日、下
 の関路も、ともにこの身を、なじみ重ねて、仲は円
 山、たゞ円かかと、思いそめたが縁じゃえ。
 トこのうち、手鞠の振りあって納まる。
 へ梅とさんく、桜はいずれ兄やら弟やら、わきて
 言われぬ花の色エ、あやめ杜若、いずれ姉やら妹や
 ら、わきて言われぬ花の色エ。西も東もみんな見に
 きた花の顔、さよおエ、見れば恋ぞ増すエ、さよお



「花の姿の乱れ髪」 中村雀石衛門

神さんと約束あれば、つい新枕、靡に恋すれば浮世
 じゃえ、深い仲じゃといたて、こちゃ、こちゃ
 こちゃ、よい首尾で、にくてらしい程いとらし。
 へ花に心を深見草、圃に色よく咲きそめて、紅をさ
 すが品よく形よく、あゝ姿やさしやしおらしや、さ
 アくそうじゃいなく、草月五月雨早乙女早乙女
 田植歌、裾や袂を濡らしたさつさへ花の姿の乱れ
 髪、思えばく恨めしやとて、龍頭に手をかけ飛ぶ
 よと見えしが、引きかついでぞ失せにける。
 トこのうち、羯鼓の振りあって、ト釣鐘落ちる。この
 内へ白拍子消える。同宿びっくりなし、耳をおさえ倒る
 る。
 皆々 万歳楽く。
 沢山 これく、今の音は何であろうぞ。
 陀仏 なんだか知らぬが、アレくまだゴンくとうなる
 ようだ。
 齋念 なんでも鐘楼のあたりであったの。
 ト上手を見て、
 ヤア、コリヤ鐘が落ちた。
 善心 なに、金が落ちていた。そいつは豪気だ。
 沢山 おれが拾うのだく。
 陀仏 イヤく金ならおれが先がけた。

三人 イヤくおれが拾うのだく。
 齋念 エ、欲ばり坊主め、かねはかねだが落ちたのは釣
 鐘だ。
 ト三人、上手を見てびっくりなし、

三人 ヤアくくく。
 沢山 なんと御坊たち、このまゝにしておいては、師の坊
 のお目玉であろうぞ。
 陀仏 とはいえ、大きな釣鐘を、四人ぐらいで上がりもせ
 ず、
 齋念 こゝらが目頃の法力で、祈り上げるは愚僧ら四人。
 善心 さらば祈りに、
 四人 かゝろうか。

へうたうも舞うも法の声、ア、何でもせ何でもせ、
 春は花見の暮ぞゆかしき、夏は涼みの舟ゆかし、よ
 いくよいくありやくこりやくよいとな、秋
 は武蔵の月ぞゆかしき、冬は雪見の亭ゆかし、よい
 よいよいありやくこりやくよいとな、浮き
 に浮かれて第一中有に迷うた、さんげく六根清
 浄、南無不動明く、ア、なんでもせい、動く
 か、動かぬぞ、なまぐさばさらんだ、真言秘密で責

やうんたら、何のこっちゃえと祈りける。
 トよろしく四人、祈りの振りあって納まる。この時向う
 揚幕にて、
 皆々 ヤレ来いヤイ。
 ト三ツ太鼓になり、向うより鱗の四天、色鉢巻、桜の枝
 を持ち、十人出で来り、花道にとまり、
 四天 鐘のうちこそ怪しき障化、隠れ忍ぶに違いない、ソ
 レ、いずれも。
 皆々 合点だ。
 トアリヤくの声にて、舞台へ来りドッコイと納まる。
 沢山 今の蛇身を祈る上は、何の恨みか有明の、
 皆々 つき鐘こそは、
 謡へスワく動くぞ祈れたく、引くやてんでに千
 手の陀羅尼、不動の慈救の無明王の、火焰黒煙を立
 て、ぞ祈りける。祈り祈られ、撞かねどこの鐘ひび
 き出で、引かねどこの鐘おどるぞと見えしが、程な
 く鐘楼に引き上げけり。アレ見よ蛇体はあらわれた
 り。

トこのうち、みなく釣鐘をあげる。中より白拍子、般
 若のこしらえて撞木を持ち出て、皆々とつけ廻りよろ
 しく、鳥羽こなり、向うより大館五郎、押辰



「鐘入り」 六代目上菊五郎

を持ち出で来り、花道にて行き合ひ、キッと見得。これよりサラシになり、押戻して舞台へ来り、ドッコイと見得になる。

五郎 今、大館五郎照貞が、武将よりの命をうけ、来かゝる法の花道へ、あらわれ出でた化物め、供養の庭の花吹雪、落花微塵とならぬうち、早く消えてなくなれエ、なにを小癪な。

へきんぜいとうぼうしよりうししょうじょう、きんぜいさいほうびやくたいびやくりゅう、一大三千大千世界の弥陀の龍王愛みん納受、あいみんじきんのみぎんなれば何処に恨みのあるべきぞと、祈り祈られ飛びあがり、御法の声に金色の、花をふらせしその姿、突にも妙なる奇特かや。

トこのうち立ちまわりあって、ト下般若、鐘の上へ上がり、傍に大館五郎、左右に同宿詰め寄せ、鱗の四天うしろ向きに上下より取り巻き、皆々引張りの見得にて、

幕